

「アレルギーの臨床」に寄せる - 936 -
矢追インパクト療法 (YIT)
認知症に対する効果

東京渋谷 山脇診療所

山脇 昂

矢追インパクト療法は喘息・アトピー性皮膚炎・アレルギー性鼻炎等アレルギー性疾患に対する減感作療法の1種として開発されましたが、疼痛性疾患にも俥効があります。色々な関節・筋肉痛の長い罹病期間の果ては sarcopenia でありフレイルです。この療法はフレイルに陥った人達の姿勢の矯正も既に発表してきました。認知症もフレイルの1部分と考えます。これら疾患を治すには、その人の中で産生される大量のエネルギーが必要です。このエネルギーは筋肉中の脂肪酸を燃焼すると得られます。この脂肪酸は血液中の中性脂肪から供給されます。この脂肪酸を効率よく燃焼させる刺激であり手段が YIT です。色々なアレルギー性疾患を治すにも、その人の中で産生される多量のエネルギーが必要です。これらアレルギー性疾患を治すのに供給できるエネルギーを産生させる刺激となるのもこの療法です。これが YIT が何故アレルギー性疾患に効くかの私の解釈であり説明です。現在主流として行われている減感作療法は何で効くのかさえ明確に説明されていません。血中中性脂肪の少ない人は、空焚き状態となり、疲労・疲弊感をもたらします。だから患者さんには何でもよく食べてくださいと進めます。

1 例目) 80 歳を超えた御婆さんが左眼周囲帯状疱疹に罹患し、痛くて痛くてたまらず、当院を聞きつけて横浜の遠くの方からやって来ました。目の周囲や頭部にもやりました。疼痛は次第に治まりましたが、この注射を嫌っている様子でした。来院されなくなって1年ぐらい経った頃又頭に打ってほしいと来院されました。今度は疼痛のためではなく、頭がすっきりし、良くなることを自覚されていたらしく、頭に打ってほしいと言うのです。聞けば御主人が小さな運送会社を経営し、急死のため自分が女社長にならざるを得なかった

そうです。この療法を思い出し来院されました。2~3回頭皮に注射しましたが、体が温かくなり、(私頭が良くなった)と本人が言うのです。会社の経営管理も上手くいっているのでしょう。1か月に1回くらいの割で継続して来院されています。2 例目) 80 歳を超えた御婆さんを娘さんが連れてきました。アルツハイマー型認知症で他医院でアリセプトとメマリーを数年間服用されているそうです。1人では暮らせなくなり、ハワイで働いていた娘さん呼び寄せました。その娘さんが当院に母親を連れてきました。長谷川氏は5点もありません。頭と背中に YIT をやりました。顔つき・姿勢が見た目にもすっきりと変わりました。娘さんは治療してもらったのだから、当然だと何も疑問はなかったようです。その後娘さんは自分の就職のための診断書を作成に来られました。母を日中1人にしておいても大丈夫と判断されたのでしょうか? お母さんは YIT 注射の次の日、デイサービスで行ったことを全部その日の夜娘さんに話し、この次あの病院には何時行くのですか? と聞いたそうです。それ1回きりでした。6~7か月後に娘さんともう1回 YIT を希望して来院されました。太って物がつかえて食べられないと言う訴えでした。頭と背中に YIT をやりました。物のつかえたような感じもなくなり、顔つきも姿勢も外目にもすっきりされ、娘さんも納得されました。猫背と腹の肥満から胃が財布のように折れ曲がり通過障害が出たのでしょう。猫背もこの療法で是正できます。YIT で姿勢の矯正を別に発表しています。ご参照ください。逆流性食道炎もこの療法で治ります。娘さんはメマリーを効かないからと自分で判断し、ずうーと飲ませていないそうです。2週間毎に通院し注射するなんて全然思っていないようです。継続はしません。この療法は保険に馴染みませんから。私も何も進めません。この娘さんはアルツハイマー型認知症は治しがたい病気で J-ADNI 研究とか A4 (anti amyloid treatment in asymptomatic Alzheimer disease) 研究中など知る由もありません。3 例目) 90 歳を超えるお婆さんが寝たきりで、往診してくださいと言われ、往診し YIT をやりました。段々物を食べるようになり、力も付いてきて太ってきました。長岡出身で、幼少

◆「アレルギーの臨床」に寄せる◆

期より黒豆のよく煮たものが大好きだったそうです。それを又食べるようになりました。寝なくなり、夜遅く廊下を這ってガスホースや電話の線を抜くようになり、ソファーに座って新聞紙を4つに切って畳んでテーブルの上にきちんと片付け、整理整頓した気持ちなのでしょう、無意味ながらも女性らしい仕草をし、昔宝塚のファンだったらしく、テーブルの上に宝塚の本が置いてあり、表紙の大きな字を読むようになりました。ある日座ってYITをやったら、「私の歯牙にもかけず、何故こんな痛いことをやるのですか？」と怒って問います。長岡出身なのでこういう方言になったのだと思います。だいぶ良くなってきたなと思いYITを止めました。そしたら段々食欲も衰え、痩せてきて寝ているようになりました。2年後には元に戻ってしまいました。眼だけは以前と違い大きなままでした。そのうち介護をしていた娘さんが大腸癌で入院せざるを得なくなり、患者さんは特養に入所されました。

この療法は皮膚刺激ですが、脳ミソも発生的には外胚葉ですから脳を刺激できると思います。神経軸索反射を利用した *antidromic* (逆走) 刺激です。最も効果的な脳刺激療法であると思います。4例目) 2人の娘さんを持つ80歳前後の御夫婦、2人ともアルツハイマー認知症になっています。奥さんの方が程度は軽く元気でした。奥さんは夫を心配してかばって、夫だけYITをやりました。費用の面で2人分は支払えないからです。夫には頭部に7個2週間に1回ずつやりました。夫の進行速度は遅くなり少し元気になった。経済的な理由で、奥さんの方はやらずにいたら進行速度が速く、変形性膝関節症による痛みも進んでいる。この療法は膝痛も治療できますがやらずにいます。今では娘さんたちは奥さんの方を心配している。娘さんたちはこの療法のことは考慮の中にはない。整形外科に連れてゆけらしい。この療法は保険は効かない。経済的な理由なので私も勧めない。ただアリセプトとメマリーを処方し続けている。夫も経済的な理由で奥さんよりも後で中断していますが、奥さんより元気でデイサービスに通っています。5例目) 75～80歳の貸ビルオーナーのご夫婦で、奥さんは長年涙目と膝痛に悩ん

でいる。自分の家の前は有名な大病院があり何度もそこへ通院していた。でも治らない。YITで涙目も膝痛も治った。涙目の治療は上眼瞼にYITをやるだけです。ついでに頭頂部と前頭部に打っていたら、((私どうも頭が良くなった)) と言うのです。それからも頭に打つのを継続しています。娘さんとこの冬オランダに行ってきたそうですが、長歩きたにもかかわらず、涙目にもならず、膝も痛くなかったそうです。夫は顔面帯状疱疹になり頭にも打ちました。痛みは治まったのですが、心筋梗塞になり、急遽入院し3か所ステント治療をやり退院してきて色々な薬を服用していますが、家族が何かおかしい、認知症になったようだと言ってきた。長谷川式で調べると明らかにアルツハイマー型認知症です。成りたての認知症です。頭に数個YITをやりました。すると又思い出すようになり、家族も変だと思わなくなりました。このように成りたて *fresh* なのはすぐ元へ戻る印象を受けました。

〔私見〕 刺激ですから脳血液関門 BBB (Blood Brain Barrier) というような物質が通過出来るか出来ないかという難しい問題とは関係なく、ダイレクトに脳を刺激できることです。実際後頭部に皮内注射すると沁みて行って脳内を刺激しているのが実感できます。後頭部には頭蓋骨を超えた先には視覚領野があります。そこが刺激され目が大きくなり、光がより多く入ってきますから、視野が明るくなり、患者さんは明るく良く見えるようになったと表現します。実際ベルの麻痺等の眼瞼下垂・外耳道に帯状疱疹ができるラムゼーハント症候群・眼筋麻痺による二重像等も治療できます。鍼治療上の百会に打つと、刺激が頭の中に沁み通って行くのが実感できます。前頭部に打つと頭がすっきりしたと言われます。つい最近ある患者さんが滝に打たれる修行をしているそうですが、頭頂部から肩・背中に打ったら、滝に打たれた後と同じ *feeling* だったと喜んでいました。この療法は確かに脳を直接刺激でき、かつ最も効果的な脳刺激療法であろうと確信します。

〔参考1〕 一般的に言えば、外胚葉は、神経系(脊椎、末梢神経および脳)、歯のエナメル質および表皮(外皮の外側部分)を形成する

◆「アレルギーの臨床」に寄せる◆

ために分化する。また、口、肛門、鼻の粘膜および、汗腺、髪と爪を形成する。Wikipediaより

この療法をやっていると頭髪と爪の伸びが早くなり、痔瘻にもある程度効果あります。これは痔瘻のことは言わずに皮膚病を治療していた方が、後になって長年患ってきた痔瘻にも良い効果があると言い出したからです。皮膚病にはアトピー性皮膚炎・自家感作性皮膚炎・ニキビ等に効果あります。乾癬症・全身性エリテマトーデスには余り効きませんでした。多分皮膚の変化が余りに早い状態や、余りに遅い状態には効きにくく、長期間を要するものと思います。ヘビースモーカーは汗腺からヤニが分泌され、タバコ臭がきつくなります。長期間 YIT をやっていると黒い皮膚が白色化してきます。ヤニが出切るとこうなるのでしょ。口内炎・歯槽膿漏・歯肉炎・アレルギー性鼻炎にももちろん効きます。人というのは段々動けるとか姿勢が良くなるとか状態が良くなってくると、((私は元々こうだった))と言って怒る人もいます。これは副作用ではありません。注射というものは、その人に納得の行く説明もなくいきなりやると自尊心を傷つけ怒ります。

〔参考2〕アルツハイマー病・パーキンソン病皮膚生検が診断の手がかりとなる可能性

タウ蛋白, α シスヌクレイン

皮膚は脳と同じ由来の組織から分化して形成されているから、

神経細胞と同様に異常蛋白の蓄積が観察されるかもしれないと考えた。

上記のような記事も4～5年前に見たことがあります。

又脂肪酸による末梢のインスリン抵抗性と耐糖能障害を脂肪毒性とも呼ぶ

〔参考3〕脂肪酸は脳関門を通れないため、脳は通常、脳関門を通過できるグルコースをエネルギー源としている。絶食等によりグルコースが枯渇した場合、アセチル CoA から生成されたケトン体(アセト酢酸)もグルコースと同様に脳関門を通過でき、脳関門通過後に再度アセチル CoA に戻されて脳細胞のミトコンドリアの TCA サイクルでエネルギーとして利用される。なお、ケトン体のうちアセトン(アセト酢酸)は最終代謝物なのでエネルギーに変換でき

ない。ケトン体は骨格筋、心臓、腎臓などでもエネルギー源となるが、肝臓ではエネルギー源として利用できない。脳はグルコースを優先的にエネルギー源として利用するが、グルコースが少ない時にはケトン体が主たるエネルギー源となる。Wikipediaより

アミロイドは、強力な病原体戦闘兵士だが、最終的に過剰になり、アミロイド自身が保護するために作られた、まさにそのシナプスと脳細胞を殺す。

矢追博美先生(2015年2月没)は、現在行われている減感作療法を工夫改良し、より安全な矢追インパクト療法を開発しましたが、この療法の前後で患者さんのアセチルコリン、アドレナリン、ノルアドレナリン、セロトニン、ドーパミン、DHEA(S)などの神経伝達脈管作動性物質 NeuroTransmit Vasculo Activator (NTVA) が短時間に増加することを採血により、私費2億円を投じてしらべられました。リラグゼーションがもたらされ、脳波検査でも α 波の増加を証明されました。生体は“適度な刺激”を“適当な間隔”で“繰り返し受ける”ことで自然に心身に健康・健全な状態を維持・増進できる。この人間生命の basic & radical な治療法を、矢追インパクト充電理論 Yaoi Impact Charging Theory (YICT) と唱えられました。現在研究進行中の A4 (anti amyloid treatment in asymptomatic Alzheimer disease) 研究等ははまだ何らの成果も得られず、そういう構想自体も含め全体的に治療法・治療薬等も発想の転換が必要だと思います。何かを治すには、その人の中で大量のエネルギーを発生させる必要があります。その発想がないのです。現在認知症の保健薬はアリセプト・レミニール・リバスタッチ・イクセロン・メマリー共認知症の進行抑制作用だけであり、改善作用ではありません。つまり改善効果のある薬剤は皆無なのです。YIT は改善効果を齎します。1 開業医であり、CT・MRI・PET・MIBG 心筋シンチグラフィー等の高価な検査手段を使用して証明することは出来ませんが、客観的臨床症状からは明らかに改善しますし、予防にもなります。それは各自の体内で大量の役立つエネルギーを発生させてくれるからです。それら高価な検査手段を有する施設とコラボレート出来ることを望みます。